

令和4年度講演会（幹事・専門委員研修会）概要録

- 日 時 令和5年2月8日（水）午後2時
- 会 場 ホテルラシーネ新前橋
- テーマ DXを活用したまちづくり～“well-being なまち”を目指して～
（デジタルグリーンシティ～人がまんなかのスマートシティ～）
- 講 師 前橋市副市長 大野 誠司 氏

（講師略歴）

1979年生まれ。

東北大学大学院工学研究科修士課程修了

2003年総務省入職。IT 戦略策定、ICT を活用した地域活性化、ICT 国際展開等の情報通信政策立案、推進に従事

2016年から2019年の前橋市情報政策担当部長を経て、2021年に前橋市副市長に就任

庁内外のDX化に取り組むほか、前橋版MaaSの高度化・広域化の実現や、リアルとデジタル両面で魅力的なまちづくりを推進する「まえばし暮らしテック推進事業」に取り組む



○講演資料：「デジタルグリーンシティ～人がまんなかのスマートシティ～」

○講演要旨（概要）

（大野副市長）

ただ今ご紹介いただきました前橋市の副市長の大野でございます。本日は貴重な機会をいただきまして本当にありがとうございます。先ほどご紹介がありましたように、本日は「DXを活用したまちづくり～“well-being なまち”を目指して～」として、講演タイトルとすると、「デジタルグリーンシティ～人がまんなかのスマートシティ～」という形で、市の取り組みをご紹介させていただければと思っております。言葉の足りないところもあるかと思えます。是非とも講演の後に、質疑応答の時間もあるということです。そうした中でさまざま忌憚のない意見交換をさせていただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、私のほうの講演に入らせていただきますが、今日、机前にお配りしたものは、これから映すスライドからだいぶ差し引いておりますので、ご理解いただければと思います。まず、少し私自身を紹介させていただきます。先ほどご紹介いただいたとおり、私は東北大学でICTを学んだ後、総務省に入省いたしました。入ったのは技術系、情報通信の技術系

の採用だったのですけれども、こういう採用の中で、私、非常に幸運なことに、技術ばかりのところではなくて、地域との関わり合いの仕事を多く経験をさせていただいております。

その大きな一つが、2009年7月から内閣官房の地域活性化統合事務局というところで、様々な自治体の方々と一緒になって、地域をどう元気にしていくかと、そうした局面でICTをどう使えるかといった取り組みをさせていただいております。その後、少し国際畑を経まして、2016年に前橋市にお世話になりました。ここでもICTを活用したまちづくりを担当させていただきました。



せっかく前橋に来るということでしたので、私、一人で来るのではなくて、家族で前橋に参りました。実は今、既に群馬県内に土地を買ってしまっていて、もう群馬にずっと住むということを決めてしまっています。前橋で3年間お世話になった後、いったん総務省に戻りましたが、それは職場的に戻っただけであって、群馬県から新幹線通勤をさせていただきながら、当時、コロナ禍が広がっていく中で、テレワークもしながら通勤をさせていただきました。率直に申しますと東京に戻って暮らすよりもこちらで暮らして新幹線通勤したほうが、時間の使い方、生活の質というものが明らかに高いなと思っておりまして、もうこちらにずっと住もうということで、群馬県民であるというのを家族でも意思決定をしたところでございます。その後、一昨年8月から、もう一度お声がけいただきまして、副市長をさせていただいております。

本日は大きく4つのアジェンダで、これまで前橋が取り組んできたことが、今こういう形になっています、その先はこういうことになっていきますといった形でご紹介をさせていただければと思っています。

まず1つ目、2つの共創のまちづくりという話に入る前に、これは、コロナ禍の前に、2017年、東京大学の先生がAIを使って、日本の将来像といったものはどういったところに行くべきか、ワーストシナリオとサクセスシナリオをAIを使って分析をしました。すると、今の一極集中の都市化へそのまま進んでいくのか、地方のそれぞれの特色を使って地方分散していくのか、大きな分れ目が2027年ごろに起きるだろうという分析をされました。もちろんそのときのシナリオとすると、ワーストシナリオは、東京への一極集中が継続し続けること。日本として生きていくにはやっぱり、地方分散型で各特色を使っていく、こうしたことが必要であるという分析をされました。

当時はコロナ禍ではありませんでしたので、実際には、新型コロナウイルスの発生によって、現実的にはこれが今まさに起きている、この瞬間にあるという状況です。5年程度早まったというところでございます。

また、こうしたコロナ禍の中で、(これ、市長の大好きな本ですけれども、)安宅和人さん

という人の『シン・ニホン』の中では、これまでの文明というのは都市化が牽引をしてきたけれども、これからのウイズコロナの世界は、開疎化、仕事をしながら、地域で仕事をしながら、この地域の豊かな環境の中で **well-being** な暮らしをしていくと、そういったことが必要な世の中になるだろうと予測をされているところでございます。

人間の寿命というのはどんどん、延びてきておりますけれども、こうした中で非常に重要視されてきたのが、単に生きているだけではなくて、健康寿命、幸せに生きていくというポイントでございます。で、それが地方分散という形で生きていくという中で、移住に求められる基準というの、やはり大きく変化をしてきたという分析も出ています。

移住によって重視したいポイントとしては、例えば広い家に住めるまち。これはまさに私が群馬に移住した大きなポイントでもあります。東京のコンクリートジャングルの中で子育てはしづらいだらうなあと。で、あとは、子育てのしやすいまち、治安のいいまち、医療体制が充実したまち。先ほどの健康寿命との関係でも、こうしたところがクローズアップされてきています。これって実は群馬県、結構当てはまっているなと思っているところでございます。

こうした社会動向がある中で、前橋としての強みは何かというのを財政面で見てみると、実はこういうコロナ禍であったり、人口減少がある中で、これは市税収入の推移なんですけど、前橋はほとんど落ちてないです。なぜかという、前橋の産業構造は、一つの産業に依存せず、様々な産業が多様にあることで、言い方をかえると、どこかが落ち込んでも、どこかが伸びて、バランスを取っているという状況でございます。

ただ、これがずっとそうなのと言われると、今ある産業も変わっていかねばなりませんし、少子高齢化の中で社会保障費の支出は増加していくなかで、これも強みではありながらも、そこに依存はできない。もちろん人口も変わっていきます。2040年には現在60代の方々が90代になって、女性に関しては、ここのボリュームが一番大きくなってしまったように人口構成も変わっていくということは、皆さん、ご承知のとおりだと思います。

そうした中で、前橋市では民間の有志の方々を中心に、まちづくりのビジョンというものをつくっていき、それを行政としても一緒になってつくっていきということで、ご存じのとおり、まちづくりのビジョン「めぶく。」ができているところでございます。

先ほど申し上げたような、単純に数字だけで見ると、人口の高齢化率も変わっていくという中で、まちづくりのビジョンとして芽吹き続けていく、前橋としてしっかり元気なまちでありつづけるというところでは、やはり市民の思いによる魅力的な取り組みが持続的に営まれる。そして、市外からもやっぱり関心を持ってもらって、来てもらう、投資してもらう。それが発展的にどんどん、どんどん展開されていくと。そういう新しい形がめぶき続ける必要があるということ、これは行政だけでは絶対にできないものです。共創のまちづくりは、むしろ民間の方々、市民の方々が中心になって動いていただくということが必須というところでございます。

共創のまちづくりの経緯とすると、2016年の「めぶく。」というビジョンが置かれてから、

この5年間でさまざまな成果が出てきております。この2016年は突然起きてきたわけではないと私は分析をしております。もう10年以上前から、さまざまな、官民連携であったり、市民の方々、民間の方々中心の共創のまちづくりが、リアルとデジタル両輪でずっと芽吹き続けてきた。それが2016年に大きなステップとなって、今、花開いていると。それが将来的な、さらに発展していくというもので、今日ご説明するデジタルグリーンシティ、その2つが融合した新しい世界、皆さんがwell-beingに生活できる世界として広がっていくと、私はとらえているところでございます。

2つ目のアジェンダ、これはおさらい的ですが、1つ目の共創のまちづくりのアーバンデザイン、リアルなほうのご紹介をさせていただきたいと思います。前橋ではアーバンデザインというものをつくっております。これは、国にも非常に認められて、2020年の国交省の先進的なまちづくり大賞も受賞しています。ここで掲げている方向性としては、エコ・ディストリクト。都市の利便性と、自然とともに暮らしを営む、そういう生活を享受していこうと。で、ミクストユース。衣食住だけではない、働くだけではない、また商業学といったさまざまなスタイル、層がまちの中に住むことで、活発な活動をしていく。そして地元固有の資源をしっかりと使っていこうというところで掲げております。

これは、前橋市役所が単体でつくったというものでは決してございません。むしろ民間の方々に主導してつくっていただいた。まさにこれをつくり上げるのも共創だったと理解をしております。

このアーバンデザインの下、今、前橋市の中心市街地は、昔からなかなか人通りが少ないよねとか言われておりましたけれども、今まさに変わってきております。アーバンデザインというコンセプトの下、行政だけではなく、民間の方々が中心となって、さまざまなプロジェクトが動いてきています。まさにまちが変わって良くなりつつある、この瞬間でございます。

少し振り返り的になりますけれども、まちづくりはこんな感じで進んできましたよというのをご紹介させていただきます。先ほど来、十年来の共創のまちづくり、リアルもデジタルが進んできていると申し上げました。リアルもまさに10年ぐらい前から、行政が何かやろうと言ったというよりは、若い人たちであったり、クリエイターであったり、民間の有志の方々が、「こういうことをやったらまちが面白くなるよね」という取り組みがどんどん進んでいきました。それが群馬イノベーションアワードとか、群馬イノベーションスクールといった形が具体化の場にもなってきています。そして、活動する拠点として、シェアフラットなどが出てきています。それらが、2016年の「めぶく。」といったところにつながっていく。

「めぶく。」というのは、市全体のビジョンでございます。ではまちづくりを、官民連携とは言いつつ、それぞれバラバラでやっていて、違う方向性で進めていくと、ぐちゃぐちゃなまちになっちゃうよね。それをしっかり、まちづくりとしてのビジョンをしっかりつくっていく必要があるのではないかということで、アーバンデザインがつくられたのです。



こうした都市計画とあえて言うと、行政が何かつくって、面白くない計画ができ上がって、実効性のない計画ができ上がることもあるかもしれないですけども、この前橋市のアーバンデザインは、前橋らしいまちづくりのビジョンというものを、そこに住まわれている方、関係される方、そしてそこに投資をしようとしている方々含めて、民間事業者の方々含めて、実行性のあるプランとしてつくっていきこう、と徹底的に議論した結果としてできたものが、この前橋市のアーバンデザインでございます。行政が作ったものではなく、民間の人たちと一緒に「この方向でやっていきこう」という指針だと私は理解をしております。

2019年につくった後、国交大臣賞をいただいたり、また昨年には、まちづくりアワードで特別賞をいただいたり、グッドデザインアワードも受賞したり、全国的に、全国から前橋のまちづくりが注目をされている、その根底にあるものが、このアーバンデザインでございます。

それを担う立場として、やはり民間の方々の推進力というのは非常に重要になってきます。「めぶく。」のビジョンが発表されたときにつくられた民間有志の会「太陽の会」は、まさに民間の推進力の大きな母体の一つだと、私たちはとらえております。このような会が存在する地域というのは、全国的に見ても、滅多に無いというところで、ほんとうにありがたいことだと見ております。さらには、実際にそれを何かプロジェクトに落とし込む、そしてまたさまざまな事業者との連携をしていく、そのモデレートをしていく、そして全体のエリアマネジメントをしていくといった担い手として、前橋デザインコミッションという法人ができて活動している、そうしたところも全国的に非常に注目を浴びているところでございます。

実際にまちが変わってきました。これ、広瀬川の河畔のリニューアル後の写真でございます。これまでコンクリート調、アスファルト調の、まあ殺風景だったところを、レンガを敷き詰めることで、さらにはレンガプロジェクトということで、確か1つあたり3,000円だったかな、を出資すると、ここに自分の名前だったり、子どもの名前であったりを刻んで、ここに埋めていただける。これは親世代としてみると、子どもの名前をまちに刻むことができると、非常にいいプロジェクトだったなあと思っています。また、このプロジェクトの第二弾がまた中央前橋駅までつながる形で今、進んでいます。広瀬川という河畔が変わってきて

いると。

他方、広瀬川の河畔近辺には、まだまだ使えるのに使われていない遊休不動産があります。私は勝手ながら、広瀬川は東京の目黒川のほとりのように、あそこは桜ですけど、広瀬川は柳で、ほとりにさまざまなお店がテラスを出しながら人が集っている、そんなまちになるのではないかと、私は思っています。そうなってくると、やはりこの遊休不動産をうまく使っていかなきゃいけない。行政として、どういうふうに使っていくかというサポートをしていく必要があるんじゃないかということで、市街地整備課が頑張ってますね、使われていない不動産をお持ちの方へ個別にヒアリングをして回ったり、そこでビジネスをやりたい、こんなお店をやりたいという方々にヒアリングをして回って、それをマッチングしていくという作業をしています。

そうしたところ、広瀬川周辺だけではなくて、まちなかの多くに、民間の方、特に若い人が、こういう店をやりたいという形で、あまり使われてこなかった古い家をリノベーションをして、おしゃれな店にして、どんどんお店ができていくところがございます。まあ一覧としてはこうなんですけれども、例えばこんな形で、すてきなお店がどんどん、どんどんまちの中に出てきている。そこに若い人たちがプレイヤーとして参加してきている。非常にまちが動き出している状況でございます。

そしてこれから馬場川通りも変わっていきます。この馬場川通り、市が管理する道路ですが、ただこれが全国的に見て非常にユニークな形で、新しいこういう図のような道路に変わっていきます。国交省から、全国初の取り組みとして認められています。通常、市の道路となれば、市が工事をして、きれいにして管理をする。それが普通です。ただ、行政がやると、まあデザインは画一的なものになってしまって、こんなふうには恐らくならないでしょう。けれども、ここは民間の方々との共働、共創で、市が管理する道路なんだけれども、そのデザインであったり使い方は民間のアイデアを活かし、しかもその資金の多くを、民間の方々からの寄付であったり、また今回認定されたことで得られる MINTO 機構という、国の機関のお金を使うことで、民間ベースですてきなコミュニティの場になるインフラとしてつくっていく。最終的にはそれを市が管理をしていく形で、全国初の取り組みとしてやっております。

ただ、やはりこれは、道路をつくるだけで終わらせては全く意味がない。やはりどういう道路に、まち並みにしていきたいのかといったところを、デザインの観点からもタッチをして、さらにそこに馬場川通りの周辺の方々も、この取り組みに関与してよかったなど、まちがにぎわったなというところにつなげていく、さらにそこに主体的に管理していくというところで、地元の方々の取り組みまで含めて、カルチャー、コミュニティづくりをしていくところまで目指した取り組みでございます。

ここを通行止めにして社会実験をしました。子どもたちが集っている、こんな将来って、すごくすてきだと思います。また、河岸近くまで少し下りる形で座って本を読む、コーヒーを飲むみたいな、こんな姿も社会実験で見えて、あと実践するだけというところがございます。

す。この社会実験で、通常の3倍近くの方がここを訪れました。で、社会実験が終わったら全部減ってしまうのかなと思いきや、やはり馬場川通りが変わってくるという認識の下、その後も多くの方が訪れています。前橋のまちが変わっていく一つの拠点にもなっていくことを期待しています。

こうした形で、10年以上前から、前橋のまちを変えていこう、特に民間の若い人を中心に変わっていこうというものが今、どんどん形になっているというのが、今の前橋のリアルなまちづくりでございます。

続いて ICT まちづくり、デジタルの取り組みについても少しご紹介をさせていただければと思います。今、国はデジタル田園都市国家構想を掲げております。なかなかよくわからないかもしれませんが、一つのポイントはですね、地方の魅力をそのままに、都市に負けない利便性と可能性を、デジタルをツールとしてうまく使ってやっていこう。移住がすすみ、地域に分散していったとしても、東京の仕事を持ちながら移住することもできるし、その逆もできるといった社会だと。そこでのポイントは、ゆりかごから墓場までの間、さまざまな市民生活にまつわる課題を、デジタルを使って便利にしていこうというのが、国のデジタル田園都市国家構想でございます。

今年度から、デジタル田園都市国家構想が大きく動いてきています。デジタル田園都市国家構想推進交付金という国の交付金ができ、その難易度別にタイプ1・2・3とございました。その中で前橋は、幸運にもですね、タイプ1から3を、すべてを実施することを国からの採択をいただいています。ただ、それは、パッとアイデアを出したから採択されたというものではなくて、こちらも民間の方々、商工会議所さんをはじめとして、大学や民間の方と、一步一步進んできた結果が今ここに出てきていると考えています。

山本市長になってからもう10年以上たちましたけれども、山本市長が掲げた構想があります。これ、2016年に策定と書いていますけれども、この図にしたのがあくまで2016年ごろということで、実際にはそのだいぶ前から、山本市長はよくおっしゃっていました。アメリカのシリコンバレーに類するものに赤城山周辺をしたいんだと。赤城シリコンマウンテン構想と書いています。ただ、実はここに書いてあることは、国のデジタル田園都市の基盤として必要なこととして、ほぼ同じことを言ってきているというところでございます。

こうした構想を実現するために、一つは、これは誇れることだと思っておりますけれども、実は前橋市内というのは、赤城の山頂でも光ファイバー網を使えるという、非常にインフラ面では恵まれています。県立の赤城公園ビジターセンターが大洞にありますけれども、昭和然したビジターセンターでした。今、民間の力を使って、これは県が主導して、非常にすてきなカフェになっています。ここ、最初はカフェでしたけども、今、コワーキングスペースにもなっています。山の上の環境の中で仕事ができるという、コワーキングスペースになるにしても、やはり光ファイバーといった通信環境のインフラがなければ、そこに来て仕事もできないと。まあそういう環境が全市域できているというのが、前橋の強みでございます。

また、教育の関係では、ご存じのとおり、GIGAスクール構想ということで、全小中学生

にタブレットを配って、しかもそれを学校内だけではなく外に出ていっても使えるという環境を整えているのは、前橋のインフラ的な強みかなと思っています。

そうした通信インフラ整備の取り組みをやりつつ、では市民にどういう便利なサービスになるかを、ICTを使って取り組んできました。ICTまちづくり構想の最初の一步が2013年。これも約10年前でございました。総務省事業の採択を受けて、当時はまだマイナンバーカードが世の中にはありませんでしたが、そのマイナンバーカードというものが世の中に出てくるぞということがわかっている中で、ではそれを使ってどういう住民サービスの向上に取り組めるかを、商工会議所も、大学とも連携をして取り組みを始めたのが、この2013年でございます。その後、2014年、2015年も、一歩ずつ、サービスをより高度化してきているところでございます。

これまでの前橋のICTまちづくりの思想としてあったのが、この下に書かせていただいているものです。お一人、お一人にまつわるデータで、お戻しできるデータは、ちゃんとご本人の手元にお戻しをしよう。ただ、そのご本人にお戻しするときに、その人というのを間違えると、それは個人情報の流出になって、もう大変なことになるわけですね。しかもそのデータを「私は見たいですよ」「別に見たくありません」「私は見たい。しかもお医者さんにも見せたい」とか、「お医者さんには見せたくないです」など、そうした意思をしっかりと確認をしていかないと、やはり個人情報の適切な管理といったところで課題になりますし、また便利だ、安心だとも思ってもらえないということにもなり、ご本人の意思を確実にもっていこうということで、当時からマイナンバーカードの活用を掲げておりました。

私が2016年から2019年まで前橋市にお世話になっておりましたけれども、マイナンバーカードは、今は全国的にも7割を超える申請率になってきておりますけれども、当時は5%とか10%を超えて、「ようやくひと山超えたかな」とか、そういう段階でございました。ただ、やはりマイナンバーカードがあればこういうことができるんじゃないかという将来のビジョンを持っておこうと、これも2016年のときに整理をしたのが、この図です。

今、国はマイナンバーカードの市民カード化というキーワードで、マイナンバーカードを、便利にいろんなところで使えるようにしていきましょうという図を国もつくっています。その要素は、実はこの図にだいぶ重なっていてですね、勝手な私の自負としては、ようやく国が前橋に追い付いてきたなと思っているところです。

少し当時つくったサービスのご紹介をさせていただければと思いますけれども、一つ目は、紙の母子手帳を電子化して、スマホで使えるようにする。お子さんをお持ちの方であればわかるかもしれないのですが、乳幼児のワクチン接種のスケジュールは極めて複雑難解、いつ接種しに行けばいいのかわからないというところを、スマホでお知らせをしてくれる。さらには、市が保有する乳児健診の結果を、わざわざ自分で入力しなくても、スマホにちゃんと届くという、そういう仕組みをつくったものです。これを一致、紐付けるには、やはりマイナンバーカードが必要でした。

あともう一つ、マイタクが代表的な例としてありますので、こちらは動画をご覧ください。

(動画視聴)

このマイタク、非常に人気の制度で、月間2万回ぐらい使われる制度になっています。1回使うごとに紙が1枚使われていくのですが、2万枚の利用券がタクシー利用者を通じて市役所に届く、その打ち込み作業をするという、コロナ給付金の際のデジタル敗戦を地で行くようなことを当初やっておりました。ただ、それでは回っていかないよねという話で、マイナンバーカードを使って今年度から完全に一本化し、紙のやり取りは全廃いたしました。現在、マイタクを実際に利用していただいている方の9割以上はマイナンバーカードを取って使っていただいています。そういう意味では、マイナンバーカードを身近に使うという事例としても、全国的に先進的なものをつくれたかなと思っております。

交通の分野で申し上げますと、皆さん、群馬は自動車、自家用車大国だということはご存じのとおりでございます。他方で、ご高齢になったときに免許を返納しても暮らせる生活を社会としてつくっていかねばならない。一方で、今、バスやタクシーの運転手さんは、壮絶な人手不足という中で、将来的には自動運転にしっかり切り替えていかねばならない。前橋では、前橋駅から中央前橋駅のシャトルバスをモデルケースとして、自動運転バスの実装に取り組んでいます。全国的に自動運転なんてたくさんやっているじゃないかというふうにお思いかもしいです。ただ、前橋が全国的に非常に特徴的なことをやっているのはこちらでございます。

通常、自動運転車両を走らせるときは、ほぼ車を止めて試験走行するのがほとんどですけれども、一般車両との混在下で、しかも市街地、まちのど真ん中でやっているのは一つの特徴でございます。さらには、既存の路線バスのままで、一般乗客を乗せて、しかもこのシャトルバスではしっかりお金を取って運行しているところでございます。今年度からは、実証実験のための車両ではなくて、ここを運行しているバス会社所有のバスを自動運転のものに切り替えてやっているところが、非常に特徴的なところでございます。

18年ごろからやっているのに、まだできないのかというご指摘もございしますが、段階的に機能向上していくとともに、国の規制をしっかりクリアをしていき、2024年度にはほぼ実装として実現していきたいと思っております。ここが実現できれば、ほかの路線にもどんどん展開していけると願っております。

先ほどはタクシー、これはバスでございますけれども、やはりこれからはさまざまな新しいモビリティが出てくる中で、じゃあ群馬の交通の将来ってどういうふうに考えていくべきなのか。もちろんJRもあります。県内には私鉄もあります。バス、タクシー、様々あります。将来はマイクロモビリティと呼ばれる電動のものだったり、自動運転だったりといったものが出てくるでしょう。じゃあ、どこを目指すのかということ、しっかりビジョンを持っていくべきだろうという議論をしています。

我々は行政なので、どうしても前橋市域という、その市境をすごく意識しますが、交通で

あり、皆さんの生活というのは、市域を超える。皆さん、高崎のイオンにはよく行ったりとかするでしょうし、その逆もあつたりするでしょう。伊勢崎のスマークに行ったりだつてある。そうしたところを考えると、前橋市だけで考えていてもしょうがないよねということで、群馬県と一緒になつてつくれたコンセプトが、このぐんま共創モビリティというコンセプトでございます。

自家用車よりは少し不便だけれども、自家用車を保有しているよりは安価で、比較的便利に行きたいところに行けるという社会を、様々な交通事業者と一緒になつて、様々な新しい技術と一緒になつてつっていこうというコンセプトでございます。

それを言い換えたものでございますけれども、バスに乗る、電車に乗る、タクシーに乗るという、そういう一つ一つの交通モードを考えるのではなくて、どこに行きたいと言えば、そのルートが一括検索をされて、それにまつわる料金決済だつたり、予約もできる、という考え方を **MaaS** と言いますけれども、そうしたものを群馬県内で全国に先駆けて実装していこうというものでございます。そこには、いわゆる定期券に近いですが、定額のパッケージを取り入れていたり、ご高齢者が使う場合には高齢者割引であつたり、障害をお持ちの方であれば福祉割引がされる、そうした個人に寄り添つたところまでしっかりと盛り込んでいこうことについて、群馬県と一緒になつて今まさに取り組んでいるところでございます。

その中で、前橋版 **MaaS** の実装展開を前橋が中心となつて行っておりますけれども、その紹介動画がございますので、ご紹介をさせていただければと思います。

(動画視聴)

こうしたコンセプトで **MaeMaaS** を取り組んでおりますけれども、その将来像で我々が考えているのは、移動つて、手段であつて目的ではないですね。移動したくて移動するというのは、乗り鉄と呼ばれる人はそうですね、基本的には、どこかに行つて何かをしたいから移動するので、その目的を実現するための手段をいかにストレスがなくてできるかを目指しております、マイナンバーカードと交通系 IC カードをうまく連携することで、移動した先の小売でも、例えば市民割引ができたり、自治体のさまざまな公共施設を使えたり、美容室まで車に頼らず行けたりとか、そこで割引も受けられたり、そうしたことを目指してやっていきたいと考えております。

リアルなまちづくりつて皆さん、すごくなじみがあると思うんです。まちが変われば人も変わる。でも、少し見えにくい ICT のまちづくりをなぜ 10 年近くずっと取り組んできたか、私なりの思いとしては、やはり市民の皆さんの利便性と生活の質の向上という観点で、皆さんに寄り添つたサービス、技術というものを、しっかり前橋という地域でつっていこうと。そうすると、市外から注目をしていただける。「前橋、何か面白いことをやってるぞ。ちょっと見に行こう」と、「一緒になつて何かやろう」と、そうしたことが期待できるかと。

それって実はリアルなまちづくりでやってきたことと、ほぼ同義だと思っています。リアルとデジタルというのは表裏一体、両輪なんだなと、私なりに考えているところでございます。

ここからが本題でございます。そうした2つの共創のまちづくりが、これまでは並行してきた。これが融合して新しい将来像をつくっていくものが、前橋が提唱しているデジタルグリーンシティと私はとらえています。



デジタルグリーンシティのご紹介をする前に、少し最近の「こういう流れになっていますよね」をご紹介したいと思います。今、今回の表題にもあります「well-being」という言葉が最近非常に一般的になりつつあります。健康であるというよりは、身体的に健康であるというだけではなくて、精神的にも社会的にも、さまざまな観点で、その人が満足をしている。社会というか、お一人お一人

が満足している、そういうものの積み重ねが一つのまちだと捉えたときに、これまでは、資本主義の中で GDP 社会と呼ばれていて、2015 年ごろからは SDGs、ここで持続可能性という観点が出てきますけれども、それらが成熟した先には、質の向上の観点で、お一人お一人の満足度が必要になってくる世界が来るだろうと言われています。

「well-being って何？」でございますけれども、WHO の憲章にも、この言葉が起源としてあります。健康とは、病気ではないだとか、弱っていないということではなくて、肉体的にも精神的にも、そして社会的にも満たされた状態であることを言います。精神的な中には、感情的なものであったりとか、あとは心理的、なんかこのまちに住んでいると心理的にホッとすると、この会社であれば心理的安全性の中で働けるといったことであったり、さまざまな活動もやりやすいといったことも含めて、総合的なこととして well-being と言われていると私は理解をしています。

こうした中で前橋でも、まちづくりのビジョンとして「めぶく。」というものがあって、この「めぶく。」には、いろんな意味が私はあると思っています。これから芽吹いていくぞという活力もありますし、その芽吹かせようとする周りからのサポートもありますし、いろんな意味がある非常にいい言葉だなと思っています。

最近気付いたのですが、前橋の市章って、ご存じかもしれないですけど、極めてシンプルな丸なんです。これは松平氏の輪貫が起源ですけど、丸というのは、先ほどの「めぶく。」ともすごく親和性があると思っています。私、今回のタイトルで「人が真ん中に」と書きましたが、丸というのは、皆さんがつながって、皆さんが支え合うということにもつながるということがあって、前橋という土地は昔からそういう考えや雰囲気根底にあったんじゃないかと思うぐらい、この市章が今まさにじっくりだと個人的に思っております。

こちらは、私どもがデザインの観点からさまざまアドバイスをいただいているアートディレクターの谷川さんにつくっていただいた資料ですけども、前橋が目指す未来という

のは、「めぶく。」というキーワードの下で、アーバンデザインを形にしていきデザイン都市化していくことと、これまで培ってきたグリーン&リラックス、その両立こそが前橋の未来だと言っておられます。決して東京のようなコンクリートジャングルである必要もなく、多くの田舎である必要もなく、そのバランスが前橋の強みだと。そのときには、もう国内の都市と比べるのではなくて、世界の代表的なまちと前橋の強みというものを比較できる戦いをしていくべきだとおっしゃっております。これを谷川じゅんじさんは、クリエイティブシティと言えるのではないかと、ということでございます。

ここで、今、前橋が提唱しているデジタルグリーンシティのご紹介ですけれども、これまで前橋はグリーン&リラックスという標語の下に、市民がリラックスをしながらも、積極的に参加をして持続的なまちをつくっていくということを、これまでも取り組んできておりましたけれども、デジタルグリーンシティという言葉が今回提唱させていただいています。

もともとは、皆さん、デジタル田園都市国家って言われて、何かわかりますかというところがあります。政府・行政側の言葉で、もうちょっと市民目線で、「私たち、こういうところを目指していこう」というところを標語としてつくろうということで、デジタルを活用した社会であり、そしてグリーン&リラックスといったこれまでの前橋の取り組みを考えると、市民目線での市民参加型スマートシティの構想として、デジタルグリーンシティという呼称でいこうということなのです。

とはいえ、なかなか私の言葉でもわかりにくいかもしれないので、こちらの動画をご覧ください。なっていたらと思います。前橋市も一部出資をし、民間の方々が中心となってこのデジタルグリーンシティの実現に向けた担い手となる会社として「めぶくグラウンド」という株式会社をつくりました。その設立のときの動画でございます。こちらにデジタルグリーンシティのエッセンスが、完全に含まれていると思っております。こちらをご覧ください。

(動画視聴)

この動画はめぶくグラウンド株式会社のホームページに掲載されておりますので、ちょっと見足りなかったという方は、是非ご覧になっていただければと思います。先ほどの動画にも、共助や、データ提供といったことがありましたけれども、それって一体どういうことを簡単にご説明したいと思います。

今回、デジタルグリーンシティで実現をしたいことの大きなポイントとして、デジタル自己主権という言葉があります。ここにダイナミックオプトインという言葉がありますけれども、今、皆さんが新しいサービスを使い始めようとするとき、利用規約というものがある、そこに「承諾しますか」というチェックボックスがあります。利用規約は大抵、四十何条とかあってあって、みんな一気にスクロールしてチェックしています。その中には、「今回ご提供いただいた個人情報、このサービスについてのみ使います」というのはもちろん入っていますけど、大抵その下には、「関連する事業者、関連サービスへの提供も許諾すること

とします」と規定されていて、パッと読んだだけで、一回チェックをすると、もうずっと許諾していることになっているのが一般的です。

ただ、これからはやはり、「私が大野誠司です。44歳です。群馬県に住んでいます」とか、「健康的な特徴は〇〇です」といった個人にまつわるデータというのは、基本的には、ご自身の手元にお戻ししつつ、ご自身でしっかり管理していくことが基本にしていくべきで、「私はこの健康相談サービスを使いたいので、私の健康情報と年齢だけ送ってください。そのことを許諾します。このAというサービスには許諾します。Bという運動支援サービスには、私の身長と体重と体脂肪率だけ送ってください」と、そうしたことが、サービスによって、ちゃんと自分でコントロールしていく。加えて、「この情報は誰のところに渡っていますよ」といったことがわかるようになる。そして、それを使わなくなったときに、「もう使わないので、あなたたちに開示しません」と、解除することもできる、そうしたことが一つポイントになる、インフラ、基盤としてあるということです。

これができると何ができるかというと、私に最適な運動はこれですよといったことが提示をされる、自分自身の **well-being** につながるサービスにうまくデータを使うことができる。一方で、「44歳で、この身長で、この体重の人がいます」といったものは、個人の情報としてではなくて、ビッグデータとして見ると、「過去に痛風を患っていました」みたいなデータもあると、「44歳のこういう人は痛風の傾向あり」みたいな、匿名化された大きなデータとしては、やはり一つの有益な情報にもなるということで、そうしたことにも提供してもいいですよといったこともできる。ビッグデータとして見ると、「前橋の市民の方はこういう傾向ですね。じゃあエリア全体としてはどうということが課題ですね」というようなこともわかってくると。それに対してさまざまなサービスが行われ、そのサービスを使うことで生み出されたデータも自分自身の便利のためになったり、**well-being** になるためにも使えるし、市民全体の改善にも使える。そういう大きな循環が起きること、それでまち全体が元気になっていくことが、デジタルグリーンシティだと思っています。

私なりにこのデジタルグリーンシティのポイントを整理したのが、こちらのスライドでございます。冒頭に「相互の信頼を基盤に」と書かせていただきました。先ほど、私の自分自身のデータを誰かに提示するとき、相手がほんとうにその人なのかわかっていないと、なかなか提示しづらい。そこはデジタル上でもしっかり相互に信頼ができる、トラストな基盤が必要である。そして、逆に向こう



から見ると、私が大野誠司だということも、やはりわかっている必要があり、相互の信頼をするためのデジタル的な基盤が必要になります。あの人だから言えること、そういったものはリアルな世界であると思います。それと同じことを、しっかりとデジタルの世界でもつなげ

ていこうと。

それがあると、いろいろな人と、いろいろなサービスともつながっていけるんじゃないか。やはり信頼できる人からの共助っていうのは本当にありがたいです。でも、全然知らない、前橋市民かもわからないし、どこのだれかもわからない人から「手伝うよ」って言われると、不安ですよ。なんか犯罪に巻き込まれるんじゃないかということもある。やはり相手のことを信頼するための基盤が必要で、つながるためには必要。

そして、デジタルの最大のポイントであり、これは行政的な観点からはより離れていきますけれども、市域に捉われないというところは大きなポイントだと思っています。市内の人だけが使うのではなくて、いいものがあって、前橋をよくしたいという思いがある人であれば、市外からの人でもいいし、たまたま1回訪れた人が「前橋、楽しかったよ」って言うてくれた人が「こうしてくれたらよりよくなるよ」といったことだあって、どんどん市外の人ともつながっていけると。それを広い意味での市民、e市民と捉えると、本当にさまざまなところもつながっていく。

そして、自分のデータや、自分が提供したデータで、自分自身の今を理解することもできます。また、前橋をビッグデータとして見たときに、前橋に足りないのは何だろうと、前橋のいいことって何だろうといったことも含め、今を捉えられることになります。

今がわかってくると、今度は、じゃあそれを自分事として、じゃあ自分の改善にはどうしたらいいかっていうのはもちろん、周りのことを考えたときに、自分の子どもがこの生活をしていくときに、じゃあ自分は何をしてあげられるのかなとか、また、どういうものがあつたらいいよねということも自分事として考えられる。わからないと始まらないことが、わかるようになっていく、そして、そのわかった上で、じゃあどういう方向にいこうかと、1人だけではなくて、つながった人たちとみんなで議論をしていくこと、それがすごく大事なと。

そうしていくなかででき上がっていった共助の仕組みといったものが、自分ができることをやれば、私の思いが誰かにつながって、その人だつて誰かを助けてくれるかもしれない。そうしたことが思いをつないでいくことになるかなと思っています。

この活動をしていく中で、自然と誰かと携わる、誰かを助ける、自分のことを考える、周りのことを考える、それを総称して「参画」とここでは端的に書かせていただきましたけれども、そうやって参画していただくと。すると、人を助けたいと思うときに「こういうサービスがあると便利だな」などというアイデアが出てくれば、それが地域内のスタートアップだったり、学生さんたちが、プチ創業みたいな形をつくっていけば、それがどんどん高度化されていくと、自分自身の生活も変わるし、まちも変わっていくんじゃないか。

途中で「リアルとデジタルは両輪です」と言いました。ただ、振り返ってみるとですね、リアルとデジタル、どちらが大事かといったら、リアルが大事なのは当たり前なんです。本当にそうだと思う。なので、一人一人のリアルを充実するために、人に優しいデジタルというのをうまく使っていこうというものが、デジタルグリーンシティのコンセプトだと私は

理解しています。

一つ、これは **BOOK FES** の写真ですが、10 月末にまちなかで開催されました。私は、これはデジタルグリーンシティのコンセプトを体現した非常にいいイベントだったなと思っています。ご存じではない方がいらっしゃるかもしれないので、簡単にご紹介をさせていただくと、皆さんがお持ちの人に読んでもらいたいと思う本を、皆さん、持ち寄って、それを交換する場でした。端的に言うと古本市だろうって言われるかもしれないのですが、ただ、ここではお金は発生していないんです。私はこういう本を読んできて、こういう思いを感じたんだよといったことを、交換する人に話しながら交換をしていくということをコンセプトとしたイベントでした。

先ほど、お金が発生していないということで、資本主義的な **GDP** の観点で言えば、このイベントって、ここに集まった人の交通費と飲食費以外の経済的価値はあったかと言われると、おそらく発生してないのです。ただ、ここで、私が感じたこの本にこういうことを感じたといったこと、それを交換し合うことというのは、**well-being** の観点では、非常に大きな共感であったりとか、幸福度を上げるといったことに非常に大きな効果があったのではないかなと。

これはリアルなものでありますけれども、この裏にはですね、全員が使っていたわけではないのですけれども、裏にデジタルの仕組みがあって、双方の方がデジタル上で交換したよっていった履歴も持てると。そうすると、こういう関心があった人から私はもらったんだなと、思いもつなげられると。そうした形で非常に体現化されたいいイベントだったかなとっております。

こうした中で、ポイントとなるのが、信頼の基盤というところがございます。これが「めぶく **ID**」で志向しているというところがございます。「めぶく **ID** って何？」というところ、今、国はマイナンバーカードを強力に進めておりますし、もう 7 割の方が申請されていて、マイナンバーカードで全部やればいいじゃんという意見もあると思います。ただ、マイナンバーカードをずっと持ち歩くとといったことにも不安を感じられている方もいらっしゃるかもしれません。

どちらかという、マイナンバーカードは行政手続を中心に本当にしっかりとした本人認証であり、暗号化等を含めてですね、非常にガチッとしたものでできています。ただ、民間のサービスを使うときに、行政手続と同じように、「私、大野誠司、生年月日、住所、などなど」と全部つまびらかにして、民間のサービスを使う必要があるかという、正直そうではないサービスはたくさんあると思うのです。そのサービスを使っているのが、大野誠司という人であるということはわからなくても、同じ人が使っているということがわかるという必要は、デジタル上ですごく大事なことなのです。A というサービスを使ってそこから生み出されていったデータと、B というサービスを使ってそこから生み出されたデータ、それを 1 人の大野誠司の、同じ人のものですよとつながって、分析をすることで生み出されるメリットがあります。

それが何でこれまでできなかったかという、例えば私が今、新しいサービスに登録しようとして、Gmailのメールアドレスに登録します。で、Bというサービスで違うメールアドレスで登録をする。でも使っている人は私なんだから、両方からのデータは私のものだって、私はわかるのです。けれども、ほかの人が、本当にそのデータを一緒に扱ってもいいのだからって考えたときに、共通のIDがあることが必要になります。共通のIDがあれば、同じ人のものだから、一緒に分析をして、その人によりメリットのあるサービスを提供することができる。それを実現するのが「めぶくID」です。

このIDというものが、本人性、真正性というものが非常に大事だということであるので、スマホ上で使えるIDなんですけれども、IDをつくる時にはマイナンバーカードを使うことで、大野誠司さんですねということはしっかりと確認しておく。それ以降は、このIDで使っていこうということでございます。

先ほど来言っている自己主権では、私はこのサービスを使いますよ、使いませんといったことをちゃんと管理・主張できる。さらに削除もできる。私はこの個人情報、大野誠司という氏名、年齢、住所、全部提供をしてこのサービスを使いますということもできるし、44歳という年齢だけ提供しますということもできます。そうしたところの利便性と、匿名性も確保できるというのが、このめぶくIDの大きな特徴になっています。

ほぼ同じ話になっちゃうのですが、例えば私はアレルギー情報は提供しますよと。そうすればアレルギーに対応した食堂のメニューがレコメンドされますといったこともできます。でも、学習情報だとか学歴情報、あとは図書の読んだ履歴とかは、それは提供したくありませんといったことも自分でできます。さらには、前橋市役所には提供しないけど、民間のあのサービスだったら、便利に使いたいから使います、みたいな、そういうこともちゃんとコントロールできるというのが、このめぶくIDの真骨頂だということでございます。

こうしたものを背景に、今後、前橋ではデジタルグリーンシティという取り組みをしっかりと進めていこうというので、大きな方針を掲げています。1つ目は、先ほどの、誰にどういった情報を開示しますか、しませんかといったことをしっかりと管理できるダイナミックオプトインを前提としていきたいと思います。あとはもう一つ、Democracy2.0 with Trustということを実装していこうということです。さまざまな共助であったり、いろんなことを議論した結果をまちづくりにしっかりと反映をしていこうという、その仕組みとして、この信頼の基盤を使っていこうという考え方でございます。詳しくは後ほどご説明いたします。

方針1のダイナミックオプトインの件については、こちらは先ほど来、説明している話ですが、例えば自分の家庭の電力データがあったら、自分への還元としては、例えば電力データで何時ごろにいますとわかるものを、宅配業者に提供すればその時間に届けにきてくれる。こういう電力データをビッグデータとして社会に提供すれば、まち全体の防犯であったり、電力需要であったり、さらには交通事業者には何時ごろにこの辺り、人がたくさんいるとなれば、そのルートを考えたりとかといったこともできるかもしれませんといったところではございます。

2つ目の **Democracy2.0 with Trust** の実装、これが少し難しいかもしれませんが、ある意味、当たり前かもしれないです。今、日本でまちづくり、政策にいろいろな人の意見を取り込もうとすると、行政であれば、有識者会議をやって、そこでまとめたものをパブリックコメントといってホームページに載せて意見を募集しますというのが、一つの大きな流れになります。ただ、そういう大政策をつくろうというよりは、皆さんの日々の身の回りで起きていることの困り事であったり、新しい取り組みをみんなワイワイ議論しながらやっていこうよ、というものが非常にこれから大事になっていきます。

これは、デジタルグリーンシティのポイントという中でも説明しましたがけれども、今がわかるというのは非常に大事なことです。その上で、何を变えていこうかといったとき、**well-being** とは一人一人の幸せですので、お一人お一人が、似たような価値観の人たちがどうよくなっていくか、市全体がどうなっていくかというのは、そういう小さなものの組み合わせ、総体だと考えると、実は個々のところが非常に大事になってくる。そうしたことを、アイデアの集積とか、みんながワイワイやれる場をデジタル上でもリアルでもしっかりつくっていこうと。行政から言われたプランに対して意見を求めるのではなく、自分事として「私の生活はこうなっていきたいんだ」といったことを言う場をしっかりつくっていく。それが政策であったり、取り組みにも反映するというのが大きなコンセプトです。

その中で一つ大きなポイントになるのが、実は本人性と匿名性です。「私は大野誠司でこういう意見です」って言うことができるというのはすごく素晴らしいのですが、それをやりきれ人って実は日本じゃあまり多くないかもしれないのですね。ただ、市民の44歳で、こういう人が、こういう意見を持っています。本人だということは、ちゃんと認証はされているのだけど、でも匿名で意見を言うことで、意見交換が活発化するということもあります。それを確実にできる仕組みとして、「私は名前を出して言います」や「私は匿名なんですけど、ちゃんと私個人としての意見をしっかり言って議論に参加します」っていったこともできるようにするというのはいつのポイントだと思います。

実はこれは新しいことではなくて、これまでも選挙の投票というのは、それをアナログでやってきたことだと私は理解しています。選挙の投票所入場券が届いて、それを持って投票所に行くと、「誰々さんですね」と本人としては確認される。ただ、意見として投票するときには記名ではないので、そこは、よりいいやすい環境だといえます。ただ、投票と同じことを、さまざまな取り組みの施策としてつくっていくときに全部やるかといったら、住民投票を年間何回やるのだろうみたいな話になってしまって、それってアナログのリアルな世界ではできない、現実的にはコストと時間で絶対できない。でも、デジタルだったら、そこはデジタル空間上でそういう人たちが集まってできるというのが、今の技術でこういう確実な信頼の証ができると、できるようになったというのがこの時代だと。それをしっかりと実装していこうというのが、前橋の方向性でございます。

ここからは、結局どういう方向で市民のわかりやすいサービスになるのというところについて、ご紹介いたします。なにが **well-being** なのかを分析するにあたって、国のほうで

つくっている **well-being** 指標というものがあり、前橋を一回分析してもらいました。そうすると、自然災害に強いとか、医療・介護とか地域のつながりというのが相対的に高いという部分と、一方で、事故、犯罪、これはですね、ほとんど自転車の事故とかなんですけど、移動交通、子育てといったところがまだまだ弱いと分析されています。なので、前橋の強みをより出していく、弱いところを押さえていく。そうしたことが今後の取り組みの方向性になっていくかなと思っています。

こういうものができ上がってきますよということを3つご紹介させてください。一つは「まえばしダッシュボード」と呼ぶもので、これは私が大野誠司で何歳ですとか、どういうことに関心がありますかといったことを事前登録しておけば、その人に合わせて、その人に適した情報であったり、サービスを、スマホの画面上にパッと出る形にしていこうと。

例えば20代の女性で、今、産休中の方。でも、車は1台しかなくて、ご家族が乗っていらっしゃるという方には、「婦人科に行きたい」というときに **MaeMaaS** の運行情報であったり、健診等のスケジュール、子育て教室のイベントといったものが出てくる。

お子さんをお持ちの方であれば、お子さんの給食やイベント情報だったり、コミュニティの情報だったり。アレルギーの情報があれば、それにまつわる情報だけではなく、それをふまえた更なる情報が出てきたり。

60代の方が散歩したいときには散歩の推奨コースだとか、その途中にその方のアレルギーに配慮したサービスを提供できるお店があるとか、そうしたものをレコメンドするようなダッシュボードをしっかりとつくるということです。このように、日々の生活が幸せな生活につながっていくというところでございます。

またもう一つ、これは前橋の強みの医療・福祉・介護という中で、全国に先駆けて実装していこうと取り組もうとしている、「めぶく **EYE**」というものを、こちらの動画でご紹介させていただきます。

(動画視聴)

視覚障害の方を中心としながら、技術だけじゃなくて、人と人がつながることで、より手助けできる社会をしっかりとつくっていこうというものでございます。

また、めぶくファーム。これは方針2のところでもございました **Democracy2.0 with Trust** を実現する仕組みとして、めぶくファームというものをつくれなかと考えています。まあデジタル上で議論したりとか、リアルなところで議論をするにとどまらず、そこで出てきたアイデアをしっかりと実現をしていく、プチ創業であったり、スタートアップでお試しをつくってみると。そうしたところに賛同していただける方から出資いただいたりという形で、循環をどんどん回す仕組み全体をめぶくファームと言って、いろんなものを育てていく畑としてつくっていきたいと。そこにはやっぱり市民の皆さんがいろんな立場で自分事として参加していくと。そういう仕掛けをつくっていきたいと考えているところでございます。

最後に、繰り返しになりますけれども、ポイントとしては、やっぱり相互を信頼するというデジタルの基盤をつくった上で「つながって」「今をわかって」、その上で「自分事になって」「共助にも参加」していく。そして未来を「みんなで語り合って」いって、そのできることをアクションとして起こしていく。そうすることでまちではどんどん変わっていく。それがデジタルグリーンシティのポイントだと思っています。

もう少し言い換えてみると、やっぱりそこには、官民の連携であったり、市民の皆さんが共創・共助として主体的に参加していただく、それが一人一人に細分化されたり、前橋市内でも、まちなかなのか、赤城山なのかといったようなところで、地域も細分化されていきます。

これは私の個人的な思いですけど、やっぱりリアル体験・実感というのは、人生最大のインパクトで、それがないと人生はつまらない。デジタルはなんか難しいよね、冷たいよねって思いますけど、技術ってというのは人に寄り添えると私は信じております。空間も越えられる、地域も越えられるというところで、みんなが前橋であり、群馬に関心を持っていく中で、「まあ縁側に座りながらみんなでワイワイやっていたら、なんか面白いアイデアが出てきたよね」っていったようなことを通じて、元気にしていきたいと思っています。

あとはデジタルおせっかいというのは、デジタルで「私はこれ、できるよ」ということを気軽に言える、そういう場もつくっていききたいと。そうすることが前橋の将来に向けて元気なまちになっていくと考えております。これを前橋だけでなく、全国に広げていく。これはもちろん県内にも広げていくことはもちろんですけども、そういう意味では市域に捉われずという、県全体で取り組むべきところを目指していきたいなと思っています。

最後に写真ですけども、やっぱりこういう、リアルでなんか幸せになっていくというような場をもっともっと増やしていきたいなと思います。一番最後に、少しダジャレですけども、これは、宇留賀さん（群馬県副知事）とかも使っているのもうご存知かとおもいますが、「県都前橋生糸の市」から、ITにしっかりと変わっていく、そのキーワードがデジタルグリーンシティでございます。すみません、大幅に時間を超過してしまいましたが、ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

※講演資料「デジタルグリーンシティ ～人がまんなかのスマートシティ～」(PDF)